

審査の結果の要旨

氏名 島田 英明

本論文は、幕末期の知識人――「文士」と「志士」――を主たる対象として、歴史意識と政治思想との連関という観点から、彼らの思想を内在的に理解することを通じ、荻生徂徠から幕末の「志士」に至る政治思想の系譜を発掘した業績である。従来、幕末期の政治思想に関しては、その時代を「近代」への滑走期間として扱い、攘夷派か開国派か、尊皇派か佐幕派か、「封建的」か「近代的」かを問う研究が大勢を占めていた。これに対して著者は、幕末知識人が抱いていた“永遠性獲得願望”、すなわち何らかの事業によって名を挙げ、後世に語り継がれたいという歴史意識の存在を指摘する。そして、政治構想や時務策のレベルだけでなく、論理化されない気分や情念の機微にまで分け入りながら、徳川思想史の水脈を描き直そうとするのである。序章、第Ⅰ部（全三章）、第Ⅱ部（全三章）、終章から成る、全八章の論文である。

まず第Ⅰ部では、「不朽」「豪傑」「事業」「功名」といった語彙で語られる“永遠性獲得願望”の変遷を、荻生徂徠以降の18・19世紀の思想史の流れに即して検討し、幕末思想史へとむかう流れを追跡している。

はじめに検討するのは徂徠学派である（第一章「古文辞学とふたつの永遠」）。荻生徂徠の思想は、儒学思想の長い歴史のなかで、自分こそが経書の正しい意味を再発見し、後世に「不朽」の名を遺すことができるという歴史意識を特徴とする。そこで芽生えた永遠性への願望が、弟子の世代における学派の分裂とともに、二つの型をもつようになった。

すなわち一方で服部南郭は、古のレトリックに習熟することで自らも古人と化すという古文辞理論に忠実に、過去の君子たちの詩情と言葉に己の詩情を重ね、やがて後世の君子たちもそこに詩情を重ね書きしてくれるだろうと期待していた。当世では統治者として制度の制作にあたる機会に恵まれない境遇にあっても、過去・今・後世と続く君子たちの共同体に期待することで、自己を解放することができたのである。他方、太宰春台は、南郭らの詩文を古人の「模擬剽窃」と斥け、新たな「事業」を打ち立てる「豪傑」の人間像を打ち出す。具体的には伊藤仁斎、孟子、張横渠、商鞅といった歴史上の人物についての評論として表われるが、統治活動にせよ学識にせよ、「事業」を通して後世へ語り継がれる永遠観を打ち出し、経世策における理想的な改革者のイメージの裏づけとした。

続いて、18世紀中葉・後半の思想界を賑わせた知識人たち（井上金峨、山本北山、本居宣長、杉田玄白など）をとりあげる（第二章「豪傑たちの春」）。彼らは南郭ら徂徠学派の文人が切り開いた、思想・文藝の市場の発達という恩恵に浴しながら、詩文論としては古文辞を「剽窃」と切り捨て、前人の言わなかった「我詩」「自説」を展開することを誇りに

した。彼らの活躍は、儒学の折衷学、漢詩、国学、洋学などさまざまな分野にわたるが、いずれにおいても新奇な主張を声高に唱え、そのことで「豪傑」としての「名」を得ようとし、「不朽」を夢見た。他面で、朱子学を再興しようとする柴野栗山ら寛政正学派の儒者たちの営みは、こうした「豪傑」気取りの氾濫へのアンチテーゼという意味をもつものであった。

こうした「豪傑」的風潮に憧れつつ文人の世界に登場し、「史論」という新機軸の開拓によって成功を収めたのが、頼山陽にはかならない（第三章「頼山陽と歴史の時代」）。山陽は、政治的偉業をうちたてる英雄豪傑ではなく、彼らを歴史に刻むことで同等の事業をなしとげる「文士」という自己意識のもと、斬新な叙事文と史論体を創出した。多くは武士出身の知識人たちは、太平の世で「武」を發揮できない閉塞感に苦しみながら、豪傑文士にふさわしい事業として歴史を描くことに魅せられ、山陽に始まる史論のブームを到来させたのである。しかし天保期以降、さらに嘉永以降の幕末期になると、山陽に見られたような「文士」や「文体」の意識は希薄化し、文人的遊戯はおろか文筆業それ自体が「無用」のものとして否定される潮流も生まれる。文筆に「豪傑」の夢を託する「文士」の時代が終わり、政治的英雄としての実践に憧れる「志士」の時代が到来するのである。

第Ⅱ部では、詩文や奇説や歴史を書くことではなく、歴史を作ることに人々が熱狂した幕末という時代に生きた知識人について分析している。

まずとりあげるのは、吉田松陰である（第四章「テロルの倫理 吉田松陰」）。松陰を歴史思想という点から眺めたとき、これまで多くの研究が彼における「日本」の発見——歴史的固有性の自覚に基づく国体論——にばかり注目してきた。しかし重要なのは、松陰が和漢の別を問わず「史論」を嫌ったという事実である。幕末期は史論が流行した時期であったが、松陰はそれを過去の英傑たちへの無責任かつ無慈悲な論難とみなし、むしろ日本よりも中国史上の英雄たちを賛美しながら、「史伝」（叙事）を通じた感情の興起を重んじた。そしてみずからの生涯がひとつの「史伝」と化し、永遠に後世の人々を感奮させ続けることを夢みたのである。かかる歴史意識に支えられた「自己の作品化」が、松陰の政治意識と倫理を支えていた。

次いで、松陰の没後、西南激派の理論的指導者となった真木和泉（保臣）を分析対象とする（第五章「内乱の政治学 真木和泉」）。「形は尊氏に似るも、心は楠公なり」や「大日本史恐敷候間、此節は見事戦死之積に御座候」といった言葉が象徴するように、真木も松陰と同じく、激動期に生きるおのれを歴史的「豪傑」に見立てることで過激な政治運動のエートスを調達し、無残な敗死に永遠性の夢を見ていた。だが、松陰と異なり真木に顕著なのは、いわば歴史の必然性の感覚である。真木は頼山陽らの「勢」概念を媒介として、徳川をすでに歴史的な「勢」に見放された敗者と規定し、朝廷に対して歴史の主役としての自覚と行動を求めた。こうした歴史の必然性の感覚が、真木に限らず、文久期の尊皇攘夷派の過激化を支えたのであった。

最後に、上記の志士たちとも密接なつながりを持ちつつ、最後まで政治的实践に身を投

じることのなかった文士、森田節齋をとりあげる（第六章「文士の幕末 森田節齋」）。京撰三備の有力な尊皇攘夷アジテーターだった節齋は、政治的实践とは距離をとりつつ、しかし幕末を生きた多くの文士たちのように文人世界の黄昏を嘆き「無用」を気取ることもなかった。節齋は政治的な生に自己を燃焼させる志士たちとは異なり、彼らの行動を後世へ書き伝えることにおのれの文筆の意義を見出し、それを朝廷における烈士顕彰政策と結び付けようと考えた。それは、頼山陽以来の「文士」という自意識の所産であるとともに、松陰や真木と同じく、後世から受けるはずの視線をみずからの活力源とし、鮮烈な挫折をも含む政治的偉業によって、永遠に名を遺すことを欲した志士たちの夢とも、正しく響き合うものだった。

終章では、近代日本にむけた展望を試みている。歴史上に顕彰されることを夢見た志士たち、顕彰することに己の文筆の意義を見出した文士たちの軌跡は、一方では招魂社、さらには靖國神社に見られる「忠臣義士」の顕彰へと連なってゆく。しかし他方で、内村鑑三の講演『後世への最大遺物』においてもまた、頼山陽の詩を引用しながら、後世に遺す「記念物」としておのれの「生涯」を作品化するという思想が明らかに表明されている。歴史叙述を通じた自己の永遠化という願望の系譜は、明治期においても幅ひろく連続していったのである。

以上が本論文の要旨である。本論文の長所としては、特に次の三点を挙げるができる。

第一に、歴史意識と政治思想との関連に焦点をあてることを通じて、幕末期の政治思想、特に近年は研究がおろそかになっていた尊皇攘夷派のそれに関して、新たな理解を提示することに成功した。昨今、幕末期の思想に関して盛んな研究潮流は、むしろ公武合体派・佐幕派を中心とした公議政体論や、あるいは平田派国学者の社会的なネットワークに注目するものであり、幕末政治運動でもっともラディカルであった尊皇攘夷の志士たちについては、吉田松陰に関する研究を除けば業績が少なくなっていた。これに対して本論文は、志士たちの抱いていた永遠性への願いを発見することを通じ、実存意識の深みにまで掘り下げながら、その政治思想を明快に解き明かしている。

第二に、吉田松陰や志士たちが抱いた永遠性獲得願望の出発点を、荻生徂徠による儒学思想の革新に求め、その系譜をたどることを通じて、徳川後期の政治思想史を長く貫く系譜を発掘している。従来、徳川後期の思想史の全体像については諸学問の多様化と折衷といったとらえ方しかされていなかったが、本論文は、その時期に進行する武士と儒者との融合のなかで、歴史叙述への強い関心が生まれ、それがやがて、後世に名を遺すための政治実践へと志士たちを誘ってゆくという経緯を明らかにした。

第三に、通常は明治国家のナショナリズムの先行形態としてとらえられる、幕末の志士たちの実践に関し、彼らの気分や情念にまで分析を掘り下げることによって、その意識のありようを具体的に描くことに成功した。これは本論文が指摘する近代の戦死者祭祀に関

する理解を深めるとともに、やはり一種の永遠性獲得願望を継承したアジア主義の動向についても、新たな分析の視角を提供している。

もともと、本論文にも短所がないわけではない。

第一に、第Ⅰ部の後半に登場する頼山陽と、第Ⅱ部の前半に登場する吉田松陰との思想上の連続について、歴史論がブームになり、嘉永期以降に對外的危機感が高まったという外在的な要因に叙述が流れてしまっている傾向がある。松陰が山陽の思想をどのように受けとめ、どのように曲解したかについての内在的な分析が、さらに必要であろう。

第二に、幕末期に関する分析対象を尊皇攘夷派(特に儒学系のそれ)に限っているので、そのほかの国学派や公武合体派の知識人たちはどうだったのかという疑問を抱かせる。たとえば横井小楠が史論を好んで書いていたことなどにも説き及べば、より包括的な思想史叙述として説得力をもったであろう。

しかし以上は望蜀の嘆というべきものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士(法学)の学位を授与するにふさわしいと判定する。